

Title	<雜錄> 蒙疆建設雜記
Author(s)	森, 一郎
Citation	東洋史研究 (1939), 4(4-5): 382-388
Issue Date	1939-06-30
URL	http://dx.doi.org/10.14989/138798
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

蒙 疆 建 設 雜 記

森 一 郎

×

今度蒙疆專號を出すからお前も東洋史出身として、又現在蒙疆の空氣を呼吸してゐる一人として、是非何か書くやうにといふ命令、成る程、今の自分としては學問などは遠い昔に廢業した積りではあるが、三年間陳列館で遊ばしてもらひ、その間諸先生を始め諸先輩に色々御迷惑をかけ、又可愛がつてもらつた。言はゞ陳列館こそは僕の魂の搖籃である。便こそ出さないが、歸へつて行つても行けさうな何となく懐しい心持がする。近頃、羽田先生や、森氏を始め、小野、今西の親しかつた連中を大同に迎へ、何だか京都も近くなつた様な錯覺をさへ感じてゐる。

さういふわけで、命ぜられるまゝに何かしら書いてみたいといふやうな衝

動にも驅られる。だが前から杜撰だつた僕の頭は雜務に追はれて、ますます杜撰になり、何度も筆を執つたが、到底纏つたものは書けさうにも無い、あせつてゐるうちに期日もせまつたので、とりあへず靈邱縣々公署の一隅で本文をしたゝめた。

今次の事變は建設の爲の戰であるといふ事が言はれて居る。否、寧ろ戰そのものが建設である。聞くところによると日露戰爭のとき、日本軍

は軍紀嚴正で、日本軍の一過する所、直ちに現地人の信賴を得て、日本軍は宛かも救世主の如く迎へられたものであつたといふ。今次の事變では

戰は建設なりとの意義を日露戰爭のときよりも、よけいに持つてゐる。今日の戰は蜿蜒幾萬里に亘つて建設の戰を遂行しつゝある勇士が盡く國民の中堅であるといふ點より、國民の建設戰と言ふ事が出來よう。

換言すれば今日本は素面、素小手赤裸々なる姿を支那大衆の眼前に曝け出して建設の戰を行つてゐるのである。

破邪顯正の聖なる戰を以て如何なる聲明、如何なる外交的美辭麗句をも要せざる赤裸々なるプロポーズをなしつゝある。現今の戰に於て宣傳

が不必要といふのではない。しかし

我が國民は夜會に必要な服を着ず、外交に必要な美辭麗句を用ひず、赤裸々の姿をそのまゝぶつつけて、四億の民よ、お前達は俺と手を握れと要求して居るのである。建設の戦の重要なポイントに戰鬭行動それ自體が宣撫行動であることである。

銃後の國民は此の赤裸々なる建設の第一工作を忘れてはならないと共に、第一線の勇士もその重大なる任務を益々認識して活動することが必要であると思ふ。

一

討匪工作、或は宣撫工作の爲、時々田舎へ行く事がある。いつも感心するのは此の僻遠の地に、天主堂又は耶穌堂の教會があり、血色のいゝ顔をした外人が、その地の人々から神様のやうな信頼を得てゐる姿であ

る。

吾々が滿洲へ行つたとき、奉天の圖書館長、衛藤氏から、お前達はあの尊い態度を學ばねばならぬと、よく教へられた事を今も忘れ得ない。

學校を持ち、孤兒院を持ち、醫療所を持つて何呉れとなく老百姓の世話をしてやつてゐる。大陸の異民族の間にある吾々の念願は、斯の如き立場に徹底する事のほかに何事もない。今から言つて見ても遅い話であるが、若しも日本の宗教家がかくのごとく進出してゐたならばと時々考へないでもない。

二

東亞新秩序の建設のスローガンの下に今や東亞の民族は大きく動き出さんとしてゐる。

此の一大運動を捲き起して行く際に日本人が如何に大きな使命を有す

るものであるかは此處で贅言を要しない。然らば日本人は具體的に如何なる事をなすべきであるかといふ事を内地人と言はず日本人の幾何が之を自覺してゐるであらうか。資源の開發、産業建設も、勿論、急務たるを失はず、事變勃發以來、新聞を見ても雜誌を見ても建設的部門に於て最も目につく所である。併しそれだけでは相濟まぬ。

大同へ來て間も無い時である。政府として早速爲さなければならぬ多くの事の中に新らしき小學校の開設といふ問題があつた。教員の養成なる事も早速必要だといふので直ちに着手した。學校の建物も準備出來たとき、教科書の問題にはたと當惑した。己むを得ず一學期分の教科書を急造し、あとは滿洲國の教科書を使用する事とし、次いで教科書編纂

の仕事が係の者の手によつて始められた。

約一年半経つた今日に於て漸く出来上つたが、當時滿洲の大先輩に次ぎの様な手紙を書いた事を覚えてゐる。

文部省にも怠け者が居つて、役所へ出て来て、何するといふでもなく

大きな夢を描いて、俺は支那四億の大衆を教育する事を計畫してゐるのだと、うそぶいてゐて、その時にかふ教科書を着々として編纂してゐたとする、彼の教科書が役に立たなかつたと誰か一笑に付し得ようか。

大乘の境地に生きずんば、結局、日本人は島國根性に捉はれて、東亞新秩序建設の資格なしと罵られても仕方あるまい。

長期建設の段階に入り、物的資源の重要性と共に人的資源の重要性が

大いに認識せられて來た事は誠に結構な事であると思ふ。

國家總力戰といふ。兵隊が召集されて出動する。物資も動員を受ける。眞の東亞新秩序建設の爲に必要とせられる人が國家の意志に於て動員せられなければならない。

三

蒙疆が有する地理的特殊性に基き排共より更に滅共に徹するは新東亞の意志である。

共產軍の基幹をなすものは第八路軍である。外廓團體も相當あるらしいが、彼等の行動の特質を列挙するならば。

1、彼等は單なる武力行使團體ではない。彼等は常に組織的に民衆に喰ひ込んで來る事は共產主義運動の一般的な型と差異はない。

2、合理負擔を強調し、金のある者

は金を出せ、力のあるものは力を出せと唱へて金を集め、糧穀を集め、且つ人を集めてゐる。而も此の事も常に何々部、何々動員委員會、何々區公所等々のその仕事に應ずる組織を作り、その組織を通じて老百姓に働きかけてゐる。

3、注目しなければならぬ事は彼等のスローガンが徹底して抗日救國である點である。共產軍が民衆と結びついてゐるのが共產主義の何物たるかを理解してゐるものは勿論無い、之等匪團の大多數は強制的に募兵せられ強制的に戦はしめられてゐる抗日匪團である。

4、最近の傾向として彼等の行動が非常に困難となつて來た事、即金と糧食、銃器、彈藥に非常に困つて來たといふ事が言へると思ふ。

5、次に尋常の手段を以てしては到

底民心をつなぐ事を得なくなり極度の恐喝を行ひつゝある事である。彼等は民心の離反を極度に恐れ老百姓より掠奪する事、又強姦する事等を絶対に禁じて居る。

要するに之等の事象は彼等が愈々斷末魔の叫びを擧げつゝある證據に他ならぬ。これらも日本軍討伐行動により、漸次活動範圍を縮小されつゝあり、今では省境附近の極小部分を除いては彼等の横行跋扈を見ない。併し斯の如き狀況により、彼等の行動がしだいに潜行的になつて来る事は當然豫想される。

四

晉北の宣傳にとられる恐れがあるから、書くのはどうかと思つたが、實際の事を有りのまゝに書くのだから、讀んで頂く人にとり何等かの参考にもなるかと思ひ、大同に産聲を

擧げた感日協進會なるものを紹介し度いと思ふ。

滿洲國には協和會なるものがあり北支那に新民會なるものがある事は既に周知の事實である。

中華民國臨時政府よりも先に出来た蒙疆の察南、晉北、蒙古三自治政府に於て、北支那に於ける新民會の如きものが、發會せられずに居たといふ事實から一應蒙疆に於ける考へ方といふ如きものを推察されたい。

それは蒙疆の三自治政府が政府機構の充實擴充を何よりも先決問題としたからである。晉北自治政府は大綱領、一、感謝日本、二、產除紅匪、三、發揚道義、四、建設樂土の實現に向つて進みつゝある。

ところが、最近、最高委員夏恭氏を始めとして、官吏及民間有識者の間に、何とかして民間の意志を判然

と反映し、樂土晉北の建設に邁進する機關を設立したいといふ議が起つた。此の事が管内全縣の代表者に圖られ、三月五日遂に感日協進會なるものの發會を見たのである。

此の會の發會に當つては吾々日系官吏は全然與り知らなかつたのである。日本人のみが表面に立つて聲を囁らして依存日本、打倒共產を叫んで見ても、その效果たるやおぼつかない話である。しかるに今は現地住民の發議と經營の下に晉北感日協進會なるものが生れたのである。

かくて一日と民衆の蒙が啓け、今や民衆自作の手によつて、鬱勃として建設の一大運動が捲き起されんとしてゐる。

五

昨年九月、五臺作戰のとき、宣撫のために従軍した。

從軍宣撫班の主たる任務は、勿論作戦部隊と行動を共にし、敵を打つた後その近傍の部落民に日本軍出師の意義を文書、又口頭を以て説き、或は種々の品物を與へる事等の方法によつて、老百姓をしてよくしづめる事である。

日本軍の大砲、又鐵砲は決して善良なる老百姓を打つ爲のものに非ず老百姓の敵なる紅匪を打つ爲である旨を呑み込ませなければならぬ。しかし、日本軍がはじめて入る地方では、紅匪の逆宣傳に風靡されて、日本軍が行くと住民は殆んど全部逃亡してゐて居ないことがある。これは日本軍が來たらお前達は全部殺されるのだとか、日本軍が來たら女は盡く強姦され、品物は皆掠奪されるのだといふふうに、紅匪の逆宣傳があるからである。偶々部落の隅々迄

探し、居残つてゐるものがあれば、耳の聞えない老人とか、頑是なき三歳の童子等である。人の子一人残つて居ない時には仕方がないから、部落に宣傳ビラの洪水をまいて行く。

逃げのこつた一人でも居るときには大事にして色々の宣撫品を呉れてやる、今度日本軍が來ても決して逃げるのではないぞと言ひ残して置く。

斯くして二度、三度と行く中に部落民も次第に日本軍は無暗に良民を殺しはしない、又掠奪もしなければ強姦もしないといふ事が次第に判つて来る、そののみならず色々の宣撫品を貰ふの中には飛んで来る子供なども居る。その中に、村長とか村の主立つた連中と顔見知りになる、さうすると向ふから挨拶して来るやうになる。かうなれば從軍宣撫としては大體目的を達した方で、逐次敵

情を知らして呉れる様になつたりする譯である。

第一戦部隊の前進と共に、後から／＼と工兵が道路を作つて行く。第一線部隊は匪賊を撃つて行くのだから、前進しようと思へば何里でも前進する。併し道路作りは仲々思ふ通りに行かない。

共產軍の道路破壊はなか／＼徹底してゐる。破壊が大きくて、人夫を必要とするときには、人夫を供給しなければならぬ。縣公署から五百人とか、千人とか徴達するわけだが、匪賊のなかを行くのだから、人夫といへども命がけである。金を貰はないでも逃げ歸るやつがある。人夫が毎朝何人か宛へつて半數ぐらゐになつてしまふ。仕事場に彈のとんでくるのは味方の彈といへども、あまり氣持のよいものでない。人夫と言へ

ば、何處の工夫も似通つたものであるが、田舎の工夫は皆その邊の老百姓なのであるから、人ずれにしてゐない純朴、從順なものである。三日

間も行動を共にしてゐると全く可愛くなつて来る。朝早く部落の外に整列して何ヶ班かに分ける、自分は馬に乗つて先頭に立ち工事現場迄誘導する、勿論日によつては第一線部隊より先に行く事もある。そんな時には一緒につれて來た警察官を斥候に出す、各班工事の部署に就くと、馬で後へ行つたり前に行つたりして眞正眞銘の工夫監督である。中には老頭兒も居れば小孩兒も居る。三十分も働くと一齊に休憩させてやり、一通り見渡して、よく動いて居た奴には煙草を一本づゝ分ち與へる、といった様な工合である。粟飯の炊き出しをやる譯だが、中には冷えた粟飯

を喰つて腹が痛いといつて道傍に寝轉んでゐるのが居る。さういふ手合には宣撫用に持つて來た胃の藥を分ち與へてやる。

九月の下旬に行を起し、十月四日

晋北東南隅に只一縣未接收のまゝ残されてゐた靈邱縣に入城した。一年に垂んとする期間、共產軍の手に委ねられてゐた縣城の荒廢は言ふも更なり、城壁も随分ひどく破壊されて

ゐた、住民は勿論敵の逆宣傳により殆んど全部逃亡してゐた、全く廢墟の町であつた。半歳を経た今日、自分は四たび此の靈邱に來て此の稿を草して居る、入城當時は毎晩匪賊が近所迄やつて來てパン／＼打ち込んで來たものだつた。しかし、いまだはそれもなくなつた、と言つて縣の連中と笑話をして居た所が、その晩に來ずに次の晩に來て、パン／＼の

挨拶をして行つた事を覚えてゐる。

敵も後退して打つ彈も無くなつたのであらう。これはまことに駐屯部隊の賜物である。

六

舊正月の屠蘇氣分が未だ醒めざる二月の末から三月の始にかけて、三日ばかり大いに一年の計を圖らうといふ譯で管内縣長及日系官吏の會議を開いた。

一年前の會議では匪賊の横行を涙と共に訴へられ、吾々も全く答へに窮した事だつたが、今度の縣長會議では、一、二の邊縣をのぞいて全くこのことがなく、何事も圓滿に進捗した。一年前の縣長連中の憂鬱だつた顔に引換へ、此の時の縣長連の顔は血氣もよく、希望の色があり／＼とあらはれてゐた。一年前には出て來たたくても、連絡の都合で期日迄に

間に合はなかつたり、緊急の事件で出て來られなかつたりして、全部揃ふ事は殆んど無かつたのに、今度は晉北十三縣の縣長と日系官吏の全部が擧つて一堂に會し大いに一年の計を圖つた事だつた。一年前迄は、縣長の惻々胸を打つ報告に、身の毛のよだつのを覺えたが、今度だけは喜色面にあふれるを見て、却つて身の毛のよだつを覺えた次第である。

七

蔣介石をたゞき倒すだけならば容易かも知れない。併し四億の民衆に代つて、民衆の敵たる蔣介石一派を打ち、その黒幕を撃ち、支那に新しい秩序を建設するのは容易な業でない。しかし、その容易と容易でないにかゝはらず、新しい秩序を建設しなければならぬ。それは蒙疆だけでなく東亞百年の大計である。